

青衿

第五十一号

ゆえ

第五十八号



TMU 文藝部

◇部長挨拶◇

こんにちは。文芸部部長の西川と申します。この度は青衿をお手に取っていただきありがとうございます。今回の青衿もコロナウイルスの影響により、インターネット上での公開という形をとることになりました。早いもので初めてのオンライン授業が行われた前期ももう終わろうとしています。活動が行えない中原稿を出してくださった部員には尊敬の念に堪えません。

今回も素敵な作品が掲載されています。ぜひごゆっくりお楽しみください。

文芸部部長 西川知里

◇青衿とは◇

『詩経』鄭風・子衿の「青青たる子が衿」の句の注、「青青は青い領なり学生の服するところ」から、学生のこと。

小学館『大辞林』第二版より

◇ブログ「語り月夜」と Twitter に関するお知らせ◇

東京都立大学文芸部では「ゆえ」のバックナンバーを掲載するブログ「語り月夜」を運営しております。URL は下記のとおりです。ぜひご利用ください。作品に対するご意見、ご感想は随時受け付けておりますので、コメント欄に書き込んでいただけると幸いです。

また Twitter にて広報を行っております。そちらから「語り月夜」へ飛ぶこともできますので、併せてご覧ください。

その他、ブログに関してご意見、ご感想等がありましたら、下記のアドレスにご連絡下さい。

東京都立大学文芸部『語り月夜』

<http://tmubungei-yue.seesaa.net/>

Twitter アカウント

@tmulc

メールアドレス

tmubungei.yue@gmail.com

◇目次◇

青衿 第五十一号

夕方の一番星

大塚慎太郎

…三

誰かの日常 深夜

朝霞

…七

人生の循環

深山わたる

…八

ゆえ 第五十八号

白南風ドロップス 十一 大塚慎太郎 …十五

あらすじ

「部内で起こっている問題を解決してほしい」
部室の鍵紛失、大道具の破損と公になっている問題以外にも、謎の袋を部室で見かけたという。後輩から相談を受けた陽鞠、美乃は後輩の所属する演劇部を訪れていた。

夕方の一番星

大塚慎太郎

ガラガラ、ガラ。景気のいい音が鳴った。

「リンちゃ、あげる」

なんてことはない。缶入りのアメだ。差し出されているのは、真っ白のアメ玉。

「いい加減、それ食べられるようになりなよ」

「辛いからヤダ」

「じゃあ他の買うとか」

「他の味は美味しいからいいのー」

私はアメ玉をもらって口に含んだ。爽やかな甘みが広がる。少しスースーする感じはあるが、言うほど辛いとは思えない。

目の前の少女は、缶を何度か振って望みの味らしい赤いアメ玉を出して食べた。右の頬を膨らませ、コロコロ動かしながら舐めている。その頬に手をつき、つまり頬杖をついて、私の目の前にあるノートを覗いた。

「それよりさ、終わったの？」

「う、まだ……」

ノートと問題用紙を見比べ、小雪は一点を指さした。

「リンちゃ、ずっと因数分解苦手だね。ここは置き換えるともっ

ときれいになるの」

彼女は今日配られたプリントの裏に、因数分解の式をよどみなく書き連ねる。

「ここが一個抜き出せるじゃん。で、出したらまだ抜けるの」

シャーペンで文字をくるくると囲み、新しい式を書いた。確かに、言われてみれば簡単な置き換えだ。

「何でこんなんが解けないんだろう……」

思わず口にしてしまった。教えてもらっている立場で言えることではないが、ハツカアメも食べられないような子供っぽいやつに教えられるのも少し悲しい。

「解けないんじゃないかって、気付かないだけだよ。そして、その鈍さは何度もやっていくうちに解消されてくからさ」

そして励まされてしまう。

「ちよっと暑いね。窓開けていい？」

言いながら小雪は立ち上がり、返事も待たずに窓を開けた。薄汚れたカーテンがふわふわとなびく。

「ほー、やってるねえ」

窓の外を眺め、やれ走れだの飛べだの、ぶつぶつと言っている。

「できたら呼んでねー」

どうやら小雪はスポーツ観戦に切り替えたらしい。私としても、問題を解く様を無言で見られているのも気まずかったのでありがた

い。

校庭の喧騒と、小雪のつま先がリズムカルに跳ねる音を聞きながら、私は問題に取り掛かった。

「ねえ、リンちゃん」

そろそろ集中も切れてきた、というころ。小雪から声がかかった。顔を上げると彼女と目が合う。たまに小雪は私のことを真つすぐに見据え、はっきりと名前を呼ぶことがあった。

「あの雲、おいしそう」

大抵はくだらない話だ。でも気になるから見に行く。

「パフェみたい」

東の方を指さしている。下が逆三角形で、上がふわふわ。

「パフェは言いすぎでしょ。ソフトクリームかなあ」

二人で窓枠に手をつき、雲についてやんや言い合う。

ふとどこからか湿った甘い匂いがしてきた。

「なんか甘い匂いがする」

「もうアメ舂めてないよ」

小雪はベツと舌を見せた。

「そういうんじゃないよ、もっと甘ったるい……」

外からではない。教室を振り返るとその匂いは少し強くなるが、菓子類も開けてない、水筒が開いたままになっているが、中身は麦

茶だ。

急にがらりと教室の扉が開いた。

「あれ、二人ともまだいるの」

同じクラスの、早川さん。部活中らしく、体操着に汗を染み込ませている。

「どしたん、さやち」

小雪の呼びかけには答えず、早川さんは自分の机を漁り出した。目当てのものが見つからなかったらしく、次は教室後方のロッカーを探る。

「あったー」

早川さんが取り出したのは、水筒だった。

「忘れ物取りに来たの」

「えっ、さっきまで全然水飲んでなかったの？」

私は思わず聞いてしまった。早川さんの様子を見るに、放課後はずっと部活動をしていたはずだ。今の季節、水分補給もせずに動き回るのは得策ではない。

しかし、早川さんはひらひらと手を振った。

「いやいや、これは予備。メインがなくなっちゃったところで、忘れてきたのに気付いたの」

言っただけを開けると中身をあおる。日に焼けた喉が上下した。彼女は水筒を抱えて、開いたままになっていた教室の扉に手をか

ける。

「じゃ、私もう練習に戻るね。夕方雨降る予報だから、早めに帰ったほうがいいよ」

扉を閉めていくのかと思いきや、それは開けたまま、廊下を駆けていった。

早川さんに言われて気付いた。先程からずっと気になっていた甘い匂い。これは教室の床の匂いだ。湿気を吸って匂いたつ、木の床の匂い。雨の日にはこの芳甘な匂いが教室中に漂う。

「どーする、リンちゃ。終わるまでやってく？」

「傘持ってるの？」

「折り畳みがあるよん」

私も今朝、母から持たされた長傘が昇降口に置いてある。

「じゃあ、終わるまでやる。あとちょっとだから」

「ん。あ、さやち、もうグラウンドにいる。足早い」

小雪はまたグラウンドに目を向けた。

机に戻って問題用紙に目を落とすと、土の湿った匂いもしてきた。これも雨の日特有の匂いだ。確かに、早めに終わらせたほうが良さそう。

何度か小雪に教えを乞いながら、私は何とか課題を終わらせた。外を見やると、もうすでにしとしとと雨が降り始めていた。

小雪の最終チェックも通ったノートを鞆にしまい、帰り支度をすする。小雪も窓を閉め、折り畳み傘だけを取り出したリュックを背負った。

「じゃ、帰ろっか」

小雪からまた一つアメをもらった。教室を出て、今日中にやらなければならぬことを済ませた私は、軽い気持ちで階段を下る。一階の廊下では、グラウンドから追い出された運動部の生徒たちが筋トレにストレッチに励んでいる。邪魔にならないように廊下の端を歩いていくと、さすがに昇降口でやっている人はいなくて、ひっそりと下駄箱が並んでいた。

「あれ、リンちゃ今日長靴なの」

「うちのお母さんは用心深いのよ」

雨足は教室からの移動、時間にして五分もない間に、どんどん強くなっていた。庇から落ちる雨粒が地面に当たって跳ね返る様までしっかり視認できる。

この雨の中、スニーカーで帰ることを考えると長靴は有難いが、晴れた朝にカッポカッポと音を鳴らして登校した恥ずかしさに見合つかうかというと、どうにも。

「ひゅー、大雨だぜ！」

先に外に出た小雪が、傘をくるくると回しながら雨を受けている。折り畳みだと少し不安になる降り方だが、お構いなしにはしゃいで

いる。

靴を履き替えて、傘立てに傘を取りに行く。立っている傘の数を
見るに、まだ相当の生徒が残っているみたいだ。自分のクラスの傘
立てを漁る。

おかしい。私の傘が見当たらない。

「どしたん、リンちゃ」

びちゃびちゃになった小雪が中に入ってきた。

「傘がない」

「ありやっちゃ」

この学校の治安は改善の必要がある。

「しょうがない、このワタクシ様の傘に入れて進ぜよう」

小雪は自分の傘を高く掲げる。小さな折り畳み傘の半分を占領し
てしまうのは気が引けたが、背に腹は代えられぬ。大人しく小雪の
言葉に甘えることにした。

小さな安全領域にきゅっと身を詰め込み、校舎を出る。肩に触れ
る小雪の髪や制服が、さっきの遊びの時間でしつとりと濡れていた。

「あれだね、今日のリンちゃは足隠して頭隠さず、だね」

改めて言われると恥ずかしくなってくる。うつむくと目に入る、
つやつやの長靴が憎らしい。それもこれも、全部私の傘を盗んだ人
が悪い。

「んふふ、別れるまでにやむといいね」

「そんなすぐにやむもんじゃないでしょ」

「それがそうでもないんだな」

小雪はやけに自慢げに言っつて、西の方を指さした。

その方向を見ると、どんよりとした雲の先で、西の空はもう明る
かった。目の前をよぎる雨粒がことごとく、夕日に照らされて光る。

「ね、もうすぐでしょ」

彼女はにこにこして私の顔を覗き込む。自然とほころんだ私の口
元を認めて、くるくると傘を回した。

《終》

誰かの日常 深夜

朝霞

「おつー。また明日」

返される「おつかれ」や「おやすみ」の声が途切れたタイミングで、俺はボイスチャットをオフに切り替えた。ヘッドセットを外し、首と肩をぐるぐると回す。慣れ親しんだ体勢とはいえ、同じ姿勢で長時間座っていると、身体中がきしむような感覚がある。

長時間つけていたイヤホンを外すと、それまで絶えず耳元で聞こえていたゲーム音や会話、マイクのノイズなどが消え去り、一人暮らしの静寂さを普段よりしっかりと感じられる。パソコンの冷却ファンとの音と、壁にかかる時計の針の音が、小さな部屋の中に響く。

さて、と誰にもなく呟き、椅子から立ち上がった。ここで声に出すことで、強引に気持ちを切り替える。だからだといつまでもシャワーを浴びられなくなりそうな時の対処法だ。少しだけ残っていた缶チューハイを飲み干し、流して軽くすすぐ。スナック菓子の袋はゴミ箱へ。部屋は散らかっている方だが、臭いのするものはなるべくすぐ片付けるようにしている。自分の安住の地を虫たちと共有する気は無い。

積み上げた洗濯済みの衣服の山から適当な下着を引っ張り出し、浴室へ向かう。

午前二時。一般的には深夜だが、そこまで遅い時間には感じない。

手短にシャワーを済ませ、水を飲みながらスマホをいじる。と言っても、スマホを見ている時間の九割はツイッターだが。

流れてくる他愛ない言葉をなんとなく読み、落書きと題された絵師の素晴らしい絵をリツイートし、動画配信の切り抜きを流し見ている。自ずと時間は過ぎる。

歯磨きを済ませ、ベッドに潜り込む。午前三時。まだ眠くはない。ストリーミング配信が開始されたバンドのアルバムを聴きながら、ソシャゲを開き、日課になっているクエストの周回を始めた。寝る前の時間には、このくらい頭を空っぽにしてできることをするのが好ましい、と感じる。液晶を見ている時点で、良質な睡眠を得るためには好ましくないだろうが。こうでもしなくては手持ち無沙汰で眠りにつけず、朝日を拝むことになってしまう。学生という身分である以上、昼間に全く活動しないわけにもいかない。

ぼうっとしながら指を動かしていると、少しずつだが眠気がやってくる。一瞬ふっと意識が飛んだ。頃合いか、と時計を見やる。午前四時。じきに空が白み始めるだろう。朝焼けに追いつかれる前に、俺は瞼を閉じ、そのまま眠りについた。

《終》

リエムとチャムを載せた昇降車が、一号棟の側面に沿ってゆっくりと前進する。所定の位置で無限軌道が回転を止め、アウトリガーが灰色の大地を踏みしめると、作業床が六メートルほどの高さまでせり上がった。一号棟を覆うレゴリスコンクリート製掩壕の外壁に作業床がびたりと横付けされる。

二人の頭の位置には、直径二十センチメートルほどの穴がぽっかりと空いていた。チャムは足下に置かれた緩衝ケースから光学監視ユニットを取り出すと、端子をその穴にはめ込んだ。

リエムは足下のフックに自分の左足が固定されていることを確認すると、ユニットの四隅に空いた固定穴ごしに電動ドリルで外壁に穴を開けた。ヘリウムブロワーで穴から粉塵を除去し、アンカーボルトを挿入、電動ドライバーでナットを締める。圧力によりアンカーボルトが変形し、壁面に食い込んだはずだった。

ユニットの基部を軽くゆすってしっかりと固定されていることを確認し、チャムの右肩を叩いた。チャムは宇宙服の左腕に装着された端末を操作し、無線を起動する。

『一号棟制御室、聞こえてるか？ OSU-1-20の設置を完了した。動作確認をよろしく』

わずかに間を置き、設置したばかりの光学監視ユニットのカメラが左右に振れた。リエムとチャムはそれをよく観察し、動作に問題が無いことを確かめる。

『カメラの正常な動作を確認した』

『こちら一号棟制御室。映像の取得を確認』

一号棟に設置するエクステリアはこれが最後だった。チャムは左腕の端末を操作して昇降車の作業床を下降させようとしたが、リエムがそれを静止する。横からチャムの端末の画面を叩き、足場を上昇させるよう昇降車に命令した。

「ちよつと休憩」

足場が一号棟の頂面より上までせり上がり、地上から十メートルほどの高さで停止した。リエムは足場を囲う安全柵に軽くよりかかると、周囲を一望した。

チャムが呆れたように言った。

『竣工してから眺めればいいだろう』

「途中経過を見るのが楽しいんだよ」

眼下の一号棟はかまぼこ型の掩壕で覆われた全長三十メートルほどの建物だ。隣には同様の形状の二号棟が並んでいる。二号棟の向こうでは三号棟を掩壕で被覆する作業が進められており、三号棟の向こうでは四号棟を建設する工事が進められていた。

四棟の建物の隣には採掘場建屋があり、その背後には地下から開

削された土砂が小山を築いている。小山の周囲には他にも遠心精錬炉建屋や立体印刷機建屋などが建ち並び、それらの間を人間と機械がせわしなく行き来していた。

現場から少し離れた場所に置かれたうすらでかい切株型の物体は、リエムたちをここ小惑星イアンテに運んできた建設船エラン号の着陸機である。その隣にあるのっぺりとした黒い平地はもうすぐ到着する別の着陸船のための着陸床だった。

そしてそれら全体を四方から照明塔が照らしている。まだ現場は昼の時間であり頭上では太陽が輝いていたが、ここは大気が存在しない小惑星である。レイリー散乱で空全体が光っている地球上とは違い、日陰はとことん暗くなるのだ。

リエムがそうした現場の全体を一通り目に入れるか入れないかというところで、通信回線が開いた。

『本部より各員へ。まもなくグクマツツ号がイアンテ周回軌道に遷移する。着陸は本日一七〇〇時だ。それまでに作業に区切りを付けておけ』

『だとき。残念ながら休憩時間は終了だ。二号棟のエクステリアの設置を急ぐぞ』

チャムはそう言うとう端末を操作して昇降車の作業床を降下させはじめた。休憩と言えるほどの時間ではなかったが仕方が無い。もとも時間が潤沢にあるわけではないのだ。

二号棟での作業も一号棟での作業とほとんど変わりない。掩壕の外壁の端子にセンサーや端末、照明などのエクステリアを取り付けていく。端子の規格が統一されているので作業は簡単だ。取り付けが終了すると二号棟制御室と連携して動作を確認する。

作業中に一度だけ、頭上を明るい光点が通過した。エラン号の本体だ。工事が終了した後には作業員たちを小惑星プロセスルピーナに帰還させるため、軌道を周回しながら待機している。

四十個ほどのエクステリアすべてを設置し終えたところで、再び本部との通信回線が開いた。

『本部より各員へ。グクマツツ号の着陸機がまもなく降下を開始する。屋外作業は中断して安全な場所に待避せよ』

宇宙船の着陸の際にはわずかだが振動や粉塵が発生し、事故の危険もある。そのため安全のために作業を中断する必要があった。リエムとチャムは昇降車から降り、開けた場所まで移動した。

『今回の移民はメキシコ人だったか？』

チャムが尋ねてきた。チャムは作業員としてはリエムよりずっと優秀だったが、顧客である移民たちへの関心は薄い。

リエムは答えた。

「メキシコとかグアテマラとかベリーズとか……。カリブ連合の連中だよ」

『そうか』

尋ねてきたわりには興味がなさそうな返事だった。月面生まれのチャムにはグアテマラとかベリーズとか言われてもピンと来なかったのかもしれない。

しばらくすると地平線から白い円筒形の物体が昇ってきた。グクマツツ号の着陸機だ。着陸機は減速噴射を開始し、軌道高度を落としながらリエムたちの頭上を通過。そのまま対地速度をゼロまで落とし、着陸床の上に垂直に降り立った。

着陸床が吸収しきれなかった衝撃が地面を揺らし、わずかな粉塵が舞い散る。それが落ち着く頃には地面に升降梯が下ろされ、宇宙服姿の移民たちが機内から現れた。

『機内で基地の完成を待ってればいいのに、こんな変哲のない天体になぜわざわざ降り立つんだ？』

物珍しそうに周囲を眺めたり地面を触ったりしている移民たちを遠くから見ながらチャムが問う。現場を素人に荒らされたくないという思いもあるのだろう。

「これから一生住む場所なんだ。あれは挨拶みたいなものだよ」

『ふうん』

もちろん挨拶というだけではないはずだ。半年以上もカプセルホテルのように狭い移民船に押し込められていた彼らにとって、大空と大地は本当に久しぶりなのだ。

再び本部から通信が入った。

『作業員各員は着陸場に集合せよ』

本部の指示に従って着陸場に向かうと、移民たちがざらりと地面に整列していた。人数はざっと数えると五百人ほど。事前に聞いていた小惑星イアンテ第一次移民の人数が五百人なので、これで全員なのだろう。宇宙服姿なので表情はわからないが、浮き足立っていることは所作から理解できた。

作業員たちも移民たちに対面するように整列させられる。こちらの人数は百人ほど。リラックスしているように見える者や苛立たしげに作業現場を振り返っている者など様々だ。

リエムは前者で、チャムは後者だった。

『早く作業に戻りたいな』

「まあまあ。彼らにとっては一生に一度のことなんだから」

移民たちが来るのは作業員たちが撤収する前のこともあれば、撤収した後のこともある。それは飛行距離や作業時間などの都合により様々だ。前者の場合は、こうして作業員が移民たちを簡単に出迎えるのが通例になっていた。

作業員たちの中から工事監督が歩み出て、移民たちの中からリーダーと思しき小柄な人物が歩み出る。両者は双方の中間の地点で立ち止まり、握手を交わした。

『今回は私たちの基地を建設して下さりありがとうございます』

『どういたしまして。完成までもうしばらくお待ち下さい』

式典はそれで終了だった。まだ基地は完成していないので移民たちは着陸機に戻り、まだ基地は完成していないので作業員たちは現場に戻った。

リエムが携帯端末で報道記事を読んでいると、部屋のチャイムが鳴った。端末の操作で扉のロックを解除すると、リュックサックを背負ったチャムが入ってきた。

「よう」

「あい」

社員寮の部屋は非人道的なほど狭かったが、二人の人間がぎりぎり収まる程度ではあった。リエムが足を折り曲げて部屋の奥に引込み、チャムが空いた空間を占有する。チャムはリュックサックから端末と食料を取り出した。端末の画面を点灯しつつ、こちらにカローバーを二個ほど投げて寄越す。

「ありがとう」

リエムはカローバーの一個の封を開け、口にくわえる。咀嚼するとちゃんとチョコレートのような味がした。宇宙基地で利用される再生食品も最近は改良が進んでいて、不味いものは駆逐されつつある。

チャムが尋ねた。

「何を読んでるんだ？」

「ニュース。インドの新しい月面都市が着工したとか、カナダの新しい移民船が就航したとか、国際宇宙科学連合が大学小惑星構想を発表したとか」

「景気がいいな。こっちは資格の勉強だ」

「休暇中に精が出るね」

小惑星イアンテでの基地の建設を完了し、ゲロムバン社の拠点である小惑星プロセルピーナに帰還したのは二週間前のことだ。五ヶ月におよぶ勤務を終えた作業員たちには一ヶ月の休暇が与えられていた。

とはいえプロセルピーナにあるのは生産施設と採集施設と電力施設ばかりで、娯楽施設と言えば映画館ぐらいしかない。というわけで自分か友人か恋人の部屋でたらたらと過ごすがゲロムバン社の社員の休暇の定番となっていた。

リエムは再び端末の画面に目を落とす。画面に表示されているのは、小惑星アレティアにエチオピア人の移民が到着したという記事だった。リエムは自然とイアンテに移住したカリブ連合の移民たちのことを思い出す。彼らは今頃、リエムたちが建設した施設で生活し、リエムたちが設置した設備で資源を採掘し食料を生産しているはずだ。

永住を前提とした小惑星移民が本格化したのはここ十年ほどのこ

とだ。月面開発と火星開発を通じて天体開発技術が成熟し、新天地を求める人々が安価に宇宙に居住するための手段を入手できるようになった。毎年厳格になる環境保護規定と無縁な宇宙資源を確保したいという政府の思惑がそれを後押しし、各国が小惑星に移民を送り込むようになった。

しかし問題があった。宇宙施設の建設には宇宙工学や環境工学の高度な知識を持つ人材や、高真空・低重力環境で複雑な作業ができる人材が必要だ。そうした人材は希少で、さらに小惑星に永住することを希望する者となるともっと希少だった。

人材の速成が困難であることは月面開発と火星開発における無数の事故によって示されていた。つまり一個の小惑星に必要な人材を必要な人数だけ置くことはできないのだ。

グランピング方式はそうした問題を解決するために考案された手法のひとつだ。この方式では専門的な知識と技能を持った人員が移民に先行して小惑星に赴き、施設や設備を建設する。拠点に帰還する建設人員と入れ違いに移民たちが到着し、建設済みの基地で生活を始める。移民たちは簡単な手順に従いゆっくりと基地を保守・整備・拡張していけば良い。大幅な増築や修理が必要な際は専門家を乗せた建設船を再び呼び寄せる。

リエムとチャムが所属するゲロムバン社は、グランピング方式による基地建設を請け負う宇宙開発企業のひとつだった。

リエムは言った。

「イアンテに移民した人たち、今頃どうしているだろうね」

「さあね。今頃後悔しているかもな」

「どうして？」

「広い家には住めない。上手い飯は食えない。友人や知人とろくに連絡もとれない。遊園地にも映画館にも行けない。地球にいた頃的生活水準には一生戻れないんだ。普通ならどこかでそれを実感して後悔するだろ」

リエムもチャムもここに永住しているわけではない。プロセルピーナに居住するゲロムバン社の社員は普通、五年の勤務の後に故郷である地球か月面に帰還する。自分で希望しなければ期間は延長されない。永住が前提である移民たちとは違う。

「チャムは彼らに否定的だよ。月面生まれなのに」

「小惑星帯は地球から遠すぎる。ここでまともな生活ができる日は永遠に来ないと思うね。それに自分の家すら自分で建てられないよ。うな甘えん坊に、宇宙を開拓する能力があるとは思えない」

「いつにも増して辛辣な」

「メキシコ人の暢気な顔を思い出して機嫌が悪いんだ」

「暢気だったかなあ」

「リエムにはどう見えたんだ？」

「主役の表情だなんて」

「主役？」

リエムが表情まで観察することができたのはあのとき工事監督と握手を交わした老齢の女性だけだったが、リエムには彼女が暢気なようには見えなかった。彼女の表情は希望に溢れ、野心に満ちているように見えた。

リエムにはそれが舞台の中央にいる役者の表情のように思えた。

リエムは続ける。

「宇宙開発の最前線で仕事をしたいと思ってここに入社して、実際に宇宙開発の最前線で仕事をしていると思うんだけど、でも主役は彼らなんだよね。宇宙で生きて、人口を増やして、世界を広げているのは移民たちなんだよ」

「そう思うなら地球に帰ってから移民に応募するんだな」

「それも良いと思うけど、チャムは誘っても来ないでしょ？」

「ああ。小惑星移民なんて続くはずがないからな」

「でもチャムはここで二十年過ごすつもりだよな」

「生んで死んでという循環がここでは続かないだろうと思っているんだ。人生の一部を過ごすぐらいは否定しない。それに月面に帰ったらここで稼いだ金で贅沢するつもりだ」

チャムは過干渉気味の両親と距離をとるために小惑星帯に勤務することを選んだらしい。両親が死ぬまでは月面には帰らないつもりで、プロセルピーナでの勤務期間を限度まで延長する予定だ

と言っていた。

リエムは唇を尖らせる。

「それならここに残りたいんだけどな」

しかしここは企業運営の基地だ。ほとんど都市のような規模があるとはいえ永住はできないし、子供も作れない。生んで死んでという人生のサイクルは行われない。

まず子供が生まれることで何か変わらないだろうか？とリエムは夢想する。誰かが子供を作ることここが人生の循環の場であるという事実をまず確立するのだ。

しかしそれも現実的ではない。小惑星の低重力環境では女性は妊娠しない。そのため遠心重力施設か人工子宮が必要となるが、ここに遠心重力施設はないし、人工子宮も生産・輸入していない。

「はー人工子宮密輸できないかな」

リエムが呟くと、チャムが端末から視線を上げた。

「いきなりどうした」

「なんでもない。変なことを考えてた」

チャムは怪訝な表情をしつつ再び端末に視線を落とした。リエムも端末の画面に視線を戻す。会話が止まったので、報道記事の閲覧を再開した。

しばらくしてあの移民たちについての記事を見つけた。そこには彼らがイアンテを「ユカトラン」と勝手に改名したことが記されて

いた。

建設船で小惑星キルケに出発する前日、リエムはインドネシア共和国政府でプロセルピーナへの移民計画が持ち上がっていることを知った。

社内報の記事によると計画はゲロムバン社との共同で、移民たちはこの基地のすぐ隣に来るらしい。ゲロムバン社の設備を利用して十年以内に都市を建設する予定らしかった。

ここが人生の循環の場になるのだ。

いずれチャムのことを説得しないといけなくなるな、とリエムは思った。

《終》

十一、菖蒲の帷子纏った少女

湯ノ宮陽鞠が部室の扉をノックすると、中から数人の声が聞こえた。少し遅れて扉が開く。

顔を出したのは三年生だった。聡明そうな双眸が陽鞠と藤崎美乃を交互に見つめる。

「何か御用で？」

二人は軽く会釈して、部長の仲井戸佑花に用があると伝えた。

「部長？ あなたたち二年だね。委員会活動？」

「いえ、そういうわけでは……」

「悪いけど、こつちも部活の最中なの。きちんとした理由を出して」
彼女の態度は頑なだった。どうしたものかと二人が顔を見合わせ
思案したとき、中から明るい声がかかる。

「あれ、昼の二人組。あ、また聞き込み？」

奥のロッカーに腰かけた橋本麻里香からだった。彼女はロッカー
から降りると、佑花を連れて外へ出る。

「部長、さっき話してた探偵さんだよ。副部、ちょっとだけ頼むよ。
いいでしょ」

「あ、ちょっと！」

麻里香は佑花を廊下に残し、騒ぐ三年を連れて部室に引っ込んだ。
取り残された佑花は廊下の壁に背中をびったりとつけ、二人に臨
んだ。

「えっと、別に探偵じゃないんですけど。嗅ぎまわるようなことを
したいわけじゃなくてですね……」

陽鞠は妙に歯切れが悪かった。ここまで警戒されるとは想定して
いなかったらしい。美乃が代わりに佑花に説明を図る。

「私たち、一年の玉井さんと仲がいいんです。玉井さんが悩んでい
ると聞いて、解決してあげたくて。少しだけお話聞かせてください」

美乃は頭を下げた。陽鞠もそれに続く。佑花はそれを見て少しの
間黙っていたが、弱い声で、

「分かったよ。頭上げて」

と言った。

「ありがとうございます！ さっそくなんですけど、鍵の紛失した六
月三十日、守衛さんから鍵を借りたのは部長だそうですね。部活動
禁止の期間に部室に何の用があったんですか？」

「窓を開けっ放しにしたことを思い出したからだよ。テスト期間
に入る前、最後の活動日に私が閉め忘れて、そのことに気付いたの
が三十日の朝だった」

「ふむふむ。それで、鍵を借りたはいいけど、先輩は用事ができて部
室に向かえなくなっちゃった」

「そう、それで和美、同じクラスの三宅和美に頼んだの。そこから数人の手を渡し、最後に真智子ちゃんが部室の前で、無くなっていることに気付いた」

既知の情報ではあったが、改めて佑花の口から出たものとして陽鞠は手元に書き留めた。

「先輩は、鍵の紛失は故意だと思いますか？」

「故意？」

「はい。道具を壊す目的だけではなくて、演劇部といったら、部の中ではまあまあのお金持ちじゃないですか。金銭目当てとか」

演劇部は全国大会にも度々出場する、学校の顔となれる部活だった。美乃の調べによると、部費も毎月少なくとも額が徴収されているという。

「別に金持ちっていうほどじゃないと思うけど、それはないんじゃないかな。大体、どこの部でも部費は先生が管理するか、ちゃんとした金庫に入れておくからさ。部室の鍵だけ盗んでもしょうがないことは部に所属している人ならすぐ分かると思うよ」

佑花の言葉を聞いて、陽鞠は小さく唸り声をあげた。弱小部の部長を務める彼女は、金銭をすべて一人で管理していたので、他の部活の金銭管理については想像に難かった。

「私はね、鍵は私も含めて部員の誰かが落としてしまっただけで、大道具の破損はまた別の人がやったんじゃないかと思ってるんだ」

「ほお、それはどうしてですか？」

「ちゃんとした根拠があるわけじゃないけど、消去法かな」

陽鞠はしっかりとメモに書き留めると、数ページ戻って、玉井真智子から聞き出した情報のページを見た。

「ところで、鍵が無くなった当日、部室内で小さな袋を見たという人がいるんですが、先輩は何か心当たりがありますか？」

陽鞠の問いかけに、佑花は難色を示した。今度は佑花が唸り声をあげる。

「何か知ってるんですね。教えていただけませんか」

「……まあ、すぐ見える場所に置いといたもんね」

佑花が漏らした言葉を聞いて、陽鞠と美乃は顔を見合わせた。やはり、例の袋の持ち主は佑花らしい。初め妙に二人を警戒していたのも、この件で後ろめたさを感じていたことが一つ理由となっているかもしれない。

「守衛さんには言わないでね。できれば先生にも」

「もちろんです。私たちは真智子に話せばそれでいいので」

「あれはね、私が置いたの。朝守衛さんから鍵を借りて直接部室まで行ってね。それから何か理由をつけて和美に部室に行かせようとしたの」

陽鞠は書く手を止めて、ずっと前のメモを見返す。「何か理由」とは、三時間目の先生からの呼び出しらしい。

「あれは和美への誕生日プレゼントで、ちゃんと袋を見たらすぐそうだと分かるものだったの。いやー、和美も他の人に渡すとは思わなかったな」

佑花は腕を組んで廊下の壁にもたれかかった。

美乃は陽鞠のメモを覗き込みながら状況を整理した。読み通り部屋の袋は佑花が三宅和美に当てたものであり、且つ少なくとも鍵を紛失させたのは佑花ではない。

「昼休みが終わった後に三宅先輩から何か言われましたか？」

「ううん、何も」

「それに対して、先輩からは何か行動しなかったんですか？」

「しなかった。ちょっと気恥ずかしくてね」

「じゃあ放課後になって、三宅先輩が二年の、えっと……」

「静ちゃん、秋山静ちゃん」

「その秋山先輩に鍵を託したことについて、変だと思わなかったんですか？」

「うーん、放課後は私もちょっと慌ただしくしてたし、声かけづらかったのかな？ 和美にはただ窓を閉めてきてって頼んだだけだし」

佑花に部員を疑う気持ちは無いらしい。

陽鞠はボールペンのペン先をしまい、メモを閉じる。

「ありがとうございます。もしかしたらまたお話伺うかもしれません」

「うん、時間があるときならどうぞ」

快く頷いて部屋に戻ろうとする佑花に、美乃が声をかける。

「あの、大道具班の方にも少しお聞きたいことがあるんですが……」

振り返った佑花は困った顔を見せ、

「少しだよ？」

と言って部屋に一度引っ込んだ。

「ちよっと、何聞くの？」

「まあまあ」

部屋の扉が開き、現れたのは先程二人を邪険にした三年生だった。

「手短に頼むよ」

彼女は佑花とはまた違った態度で壁にもたれる。

「えっとお、お名前は？」

「まず名乗れ」

「あ、すみません。二年一組の藤崎美乃です。こっちが同じく二年六組の湯ノ宮陽鞠」

「うん、三年四組、進藤舞子よ」

「あ、副部長の……」

「そう」

短くそう言ったきり、進藤舞子は黙り込んだ。視線は二人から外れ、廊下の奥の方に向けられている。

これは聞き出すのが難しそうだと、美乃は心中で頭を抱えた。ま

ずはどうにかして舞子の興味をこちらに向けた。記憶をたどり、陽鞠から奪い取ったメモを見返す。

「これは私たちと同じ寮生の玉井真智子からの情報なんです、部長と一番仲がよろしいのは進藤先輩だそうですね」

美乃の言葉に、舞子は片眉をぴくりと動かした。

「真智子がそう言ったの？」

「ええ、そうです」

「へえ、ふーん……」

舞子の体が少しだけ美乃の方を向いた。

「あたしは違うとけどね」

そう言っただけ、何も無い空間に視線を戻した。この話題は失敗だったのか。美乃は少し心が苛つくのを感じていた。どうにも態度が悪い。後輩の悩みを、直属の先輩である舞子が解決させないから、無関係の美乃が出てきているというのに、と少し理不尽な不満が美乃の心を占める。

「あなたは、部の平穏を荒らされて、何も思わないんですか！ 自分たちで解決させる気も無くて、部外者に介入させる気も無くて！」

急に吠える美乃に驚いたのは、むしろ横にいた陽鞠の方だった。

美乃の顔を向け、それから彼女の手の中で無残に握り潰されたメモ帳を見た。

舞子は眉をひそめ、不機嫌さを隠そうともしなかった。初めて、美

乃を真つすぐに見据えた。

「平穏を荒らされたっていつてもね、そう大きな実害は出ていないのよ。無くなったのは鍵だけ、何か備品が盗まれたわけじゃない」

「大道具は？」

「それは、『部外者の』あなたたちに言っても分かんないだろうけど、情のある壊し方なのよね」

「情、ですか……」

舞子の独特の言い回しに美乃は戸惑った。メモ帳の皺を伸ばし、ペンを構える。

「見る人がちゃんと見たらすぐ分かるんだけどね、一から作り直すなくちゃいけないような壊れ方じゃないのよ」

「ほう」

「だからあたしは、あんたらのような部外者ではなく、少なくとも大道具破損については部内の人間の仕業だと思っている。お分かり？」

大きな身振りで二人に問いかける。

「それからあんた、自分たちで解決させる気が無いって言ったわね。大有りよ！」

舞子は先程とは打って変わって饒舌になった。

「あたしは自分が汗水たらして作った作品を壊されて頭にきてるの。この問題はあたしが解決する。分かったら帰れっ」

捲し立てて、舞子は部室へと姿を消した。

嵐の去った廊下で、取り残された美乃は陽鞠に何も書かれなかったメモ帳を返す。陽鞠はそれを受け取り、丁寧に皺を伸ばした。

「どーすんの。まだやるう？ めっちゃご立腹じゃない」

「ひまちゃん」

「ん？」

「私、燃えてきた」

美乃は開かない部室の扉を見据え、拳を強く握りしめた。

「何で、今ので何で？」

「言わせておけますか。真智子ちゃん先輩は私たちだよ！ ひまちゃんだってそう思うでしょ！」

舞子は、美乃の面倒なツボを刺激していった。

陽鞠は燃える美乃を放置し、廊下を少し歩いて周る。

演劇部の部室は、普段使用している校舎とは別の棟にあった。敷地の丁度真ん中あたりに佇む大講堂。その控室のいくつかが演劇部に割り当てられている。うち、一番大きいものをメインの部室として使っているようだった。佑花が借り、そして紛失した鍵はこの部屋のものであり、破損した大道具はその続き間に安置されていた。

大講堂は他の校舎よりもいくらか古いものであり、全体的にどこも薄暗い。二つある建物の入り口の片方に守衛室が設置されている代わりに、防犯カメラは一つも無い。そもそもの学校の方針として

内部敵を想定していないように、敷地の境界線を見張る目は多いのに対して、内部を見張る目があまり発達していなかった。

「女子校だからってのもあるのかもしれないわね……」

「何か言った、ひまちゃん？」

「何でもないわ。ちよつと、こっち来なさい」

陽鞠は廊下が折れるところに美乃を呼び寄せた。

「ここから守衛室、見える？」

「ううん。守衛室つってもっと入り口の方でしょ。こんな裏方から見えないよ」

「そこがポイントなのよねー」

大講堂の守衛は、講堂の全てを把握しているわけではなかった。

「守衛さんっていうより管理人なのよね。常時入ってくる人を見張ってるわけじゃないの。道を選べば、見つからずに部室に行くことも可能なのよ……」

陽鞠は頭に指を突き立て思案した。

「ひまちゃん、どうにも管理が杜撰だなー、とか思ってる？」

「ええ、まさに。うら若き乙女たちが何百人も集まってるのよ。いくらか何でも、穴がありすぎるんじゃないかしら。親は何も言わないの？」

「ふっふっふー、『そこがポイントなのよねー』」

美乃はにやにや笑いを浮かべ、先ほどの陽鞠の口調を真似た。

「ああ？ 何が言いたいのよ」

「まさに、親が言ってきたのが問題なの。ほら、教室の扉って一枚板じゃなくてガラスがはまっているでしょ。廊下から中の様子が少し窺えるくらいには大きなガラスが」

「そうね」

「そこからね、盗撮騒ぎがあったらしいの。もう五、六年は前のことらしいけど。廊下にあった防犯カメラから、ぎりぎり教室の中が見えて、ぎりぎり生徒の着替えが見えるか、見えないか」

「ほーん。それで過保護な親共が騒ぎ立てたと」

「いや、そこまでは知らないけど。とにかくそんな理由でカメラの角度調整じゃ飽きたらず、校内の防犯カメラは大分減らされたらしいよ。まあ、こんな講堂の廊下まで減らす必要があったかは知らないけど」

中庭を囲むガラスに手を当て、陽鞠は生い茂る外の緑を眺めた。この時点で、目撃証言から容疑者を絞り込める可能性は絶望的だ。

美乃は考え込む陽鞠をよそに、中庭へ続くガラス戸を開け外に出た。夕方の雨上がり、小さな屋外空間は異常なほどに蒸していた。小さな花を目指した美乃の顔が一瞬にして曇る。

「ねーひまちゃん、帰ろうよー」

「うるさい、黙ってなさいガキ」

温室から逃げ出した美乃は、得られて情報を整理しただけのメモ帳を覗き込み、陽鞠の背中を無理矢理押した。

「そろそろ晩ご飯の時間だよ。お腹空いた。いったん真智子ちゃんに報告しようよ」

「ほんっと子供ね。何なの、燃えてたんじゃないの？」

「温室でしけっちゃった」

腕時計を確認すると、まだまだ夕食には程遠い時間だったが、昼食を食べ損ねた陽鞠に、大きな子供に抵抗する力は残されていないか。仕方なく自分でも歩き出すと、予想外の動きだったのか美乃は前につんのめり、無様に床に這いつくばった。

「何やってんの？ 置いてくわよ」

陽鞠は立ち止まって美乃を一瞥すると、助け上げることなくまた歩き出した。

「今のはそっちが悪いでしょー」

膝についた埃を払い、美乃は駆けて陽鞠の隣に並ぶ。そのまま埃のついた手を陽鞠の制服に叩きつけた。

「はあ？ 言いがかりはやめなさいよ」

二人は応酬を繰り返しながら、大講堂を後にした。

《続》

◇編集後記◇

七月はほとんど終わりだというのに、じめじめした天気が続きますね。外出するのが億劫です。この情勢下では外出するのが億劫な方が良いでしょう。早くパンデミックも収束すると良いですね。

みなさんは遠隔講義には慣れたでしょうか。わたしは大学に行き帰りする手間が省けるのは楽だと思っていますが、自宅ではどうも気が緩みがちです。なかなか集中が持続しません。それとときどき教授が寂しそうで、いたたまれない気持ちになります。早くパンデミックが収束すると良いですね。

こんな情勢下ですから、みなさん有形無形のストレスが溜まっていると思います。人と会ったり外に出たりできないのは寂しいものです。そんなときは物語を通して人と会いましょう。物語を通じて外に出ましょう。こんなときだからこそ、われわれの頭の中にある空想の世界を大いに活用しましょう。

わたしたちの物語がその一助となることができれば、それに勝る喜びはありません。

編集 安藤晴也

青衿 第五十一号

ゆえ 第五十八号

◇発行者◇

東京都立大学文藝部

Twitter @tmulc

◇発行日◇

2020年7月29日

執筆者

大塚慎太郎

朝霞

深山わたる

編集者

安藤晴也